

特別寄稿

『茶話指月集』という書に、利休居士の逸話として次のような話があります。

利休は、ややもすると、今日の客は京都の町衆だから肩衝かたつきに茶を入れなさい、といい、明日は堺の町衆だから囊なつめに茶を入れるようにといった。

そのころでは、京都の町衆は茶の道具をもてあそぶことばかり多くて、わび茶の湯の理解は堺の町衆におよばなかったからです。しかし、天正年間（1573 - 1592）の末になると、京都の茶が盛んになって、堺の茶は衰え始めました。

この書は利休の孫宗旦の四天王と言われる茶人の一人久須美疎安（1636 - 1728）が書いたものですから、元禄時代から見た桃山時代の茶道界の様子を述べたものです。秀吉公によって、海外渡航をはじめキリスト教の禁令が始まり、江戸時代になって鎖国してしまいますと、海外貿易が行えなくなってしまい、呂宋助左衛門をはじめとする堺商人の力が衰えていくのは仕方のないことでありました。

小さな漁村にしか過ぎなかった堺港が「東洋のベネチア」とまでいわれるように発展したのは、何といっても南蛮をはじめ対明貿易の成果の賜物でした。賑わいを呈するようになった堺に移住した人々の中には、応仁の乱で京住まいが叶わなくなった人々が多く含まれていました。足利家の同朋であった利休の祖父千阿弥もその一人でしたし、堺に移住して武具に用いる皮革業で財を築いたとされる武野紹鴎の父親も若狭武田氏の一族であったといわれます。堺の納屋衆に入った人がこうした移住の人々であり、商業活動で財を築いていきました。

一方、草庵茶は奈良の珠光によってはじめられましたので、最初は奈良の塗師屋松屋や興福寺・東大寺の僧侶たちの間に広がっていきました。その後、京都や大坂堺の町衆に草庵茶が浸透していくのは十六世紀の初めでした。珠光が始めた草庵茶を深めてわび茶の湯を推し進めた武野紹鴎が誕生したのは、珠光が82歳で亡くなった文亀二年（1502）のことでした。紹鴎は珠光のあとを継ぐ名人だといわれますが、珠光から直接の指導を受けていないことは二人の生没年からわかります。

こうした堺の新興財閥の中で、いち早く茶の湯の師匠として名を挙げたのが武野紹鴎であり、津田宗達と天王寺屋一族でありました。薩摩屋を名乗っていた山上宗二の著書『山上宗二記』によれば、

堺と茶道



千 玄室

プロフィール

茶道裏千家前家元。ユネスコ親善大使。日本・国連親善大使。哲学博士。文学博士。茶道文化の浸透・発展と世界平和を願い各国を歴訪。茶道界初の文化勲章受章。国内外で多数の名誉市民、名誉博士号を受けている。

「紹鷗は三十歳まで連歌師であった」といわれています。そして、師、三条西実隆より藤原定家の『詠歌大概』の序を伝授されてから、わび草庵茶の精神を体得するようになったといわれます。紹鷗の主張するわびのこころは「正直につつしみ深くおごらぬさま」であるといわれます。しかし残念なことに紹鷗は「正風体盛り」といわれる54歳で亡くなりました。

その後堺の町を支配していたのは阿波徳島の大名三好家でした。戦国大名の中でもずば抜けた文化大名であった三好家は長慶（1522 - 64）を中心にして畿内を治めるまでに勢力を拡大していました。三好家の一族である三人衆をはじめ宗三・笑岩・実休などの武将たちは堺の納屋衆との親交を深め、茶の湯にも深くかかわっています。たとえば、三好宗三（1508 - 49）は紹鷗に茶を学び、天下一の茶入「九十九茄子」をはじめ伊勢天目・曜変天目・青磁竹の子花入などを入手して、紹鷗や津田宗達を茶会に招いています。次男釣竿斎政康（生没年不詳）も紹鷗に茶を学んだあと、利休と親交しており、釣竿斎宛の利休消息が4・5通存在しています。特に長慶の弟実休（1526 - 62）は、当代一の武将茶人と言われ、『山上宗二記』にも、

豊州三好実休ハ名物ノ小茄子・三ヶ月ヲ初テ、
其外五十種程名物所持ス、実休阿波・河内両国
ノ主也、右ノ外、名物所持ノ人モ京堺ニ数多在之、
実休ハ武士ニテ数寄者也

とまで言われています。すなわち名物茶器を五十種も所持しており、武士でありながら数寄者の風があるというわけですから、一級の評価をされていることが分かります。実休が最も親しく交わっていたのは天王寺屋宗達でした。宗達は実休に招かれて阿波まで渡り、実休の茶会にも招かれています。その時には、秘蔵の「三日月」茶壺を自慢顔で見せています。その後は長老北向道陳・千利休・今井宗久などを自会に招いておりますので、その交際範囲が堺一円に広がっていることもわかります。

永禄十一年（1568）に織田信長が上洛し、三好の家臣であった松永久秀が謀反を起こして信長と組んだことによって堺と三好の関係が終了してしまいます。そして、信長の軍門に下った堺の町衆達は、信長との接近を図らなければ生きていけなくなります。と同時に、信長の茶を支えたのも堺商人達です。そのころの堺商人の茶は紹鷗や道陳などによって既にある程度の成長はみられており、弘治元年（1555）に紹鷗が没してからは、その流れは津田宗達・宗及親子、今井宗久、千利休など

を経て大成されようとしています。信長が上洛したときには、こうした茶の湯を中心に堺の文化は、まさに絶頂期にあるといってもよいでしょう。これらの人達は皆、茶の湯を通じて信長との接近を図り、茶頭となっていったのです。信長もこうした人達をうまく利用しながら、名物狩りと茶の湯政道を遂行していきます。その中でも、信長の関心を一番かったのは今井宗久でした。紹鷗の娘婿と成り、薬屋（火薬）宗久といわれていた宗久は、信長に鉄砲の供給を行っていったからだと思います。宗及・利休を信長に紹介したのは今井宗久であり、三宗匠とは言いながらその順位は宗久・宗及・宗易（利休の事）の順であったといわれます。

しかし、この関係が逆転するのは秀吉の時代に入ってからです。秀吉は天文五年（1536）に尾張国で生まれていますから、利休より14歳の年下ということになります。秀吉の生涯についてはここに述べる必要はないと思います。茶の湯を好んだことも周知の通りです。茶の湯を政治に巧みに利用したのは信長であり、秀吉もそれがなかったとはいえませんが、信長に比べると秀吉の場合は、はるかにみずから茶の湯を楽しんでおり、天正十五年（1587）の北野大茶湯などはその極みであったといえるのではないのでしょうか。秀吉自身、結局は茶の湯が好きで好きで仕方なかったというのが本音ではないのでしょうか。そのために、堺支配は、政治的にも文化的にも重要であったといえます。秀吉は、信長の時代から堺奉行も務めていた松井友閑を政所として配置します。堺出身の僧侶でもあったといわれる友閑は、北庄に屋敷を構え、茶会を開きつつ堺衆との交友を深めていきます。その間に円照墨蹟・無準墨蹟・瀟湘八景の「煙寺晚鐘」絵・痴絶墨蹟・曜変天目などの唐物の名品を手にするまでになっています。しかし天正十四年には堺政所を罷免されています。

堺の町衆達はこうした武将たちをうまく利用しながら発展をたどっていきますが、秀吉が京都に聚楽第を営み、利休が天下一の名を得ることによって京都在住を余儀なくされ、天下の三宗匠としての利休・宗及・宗久も聚楽第や大坂城などでの茶会を担当するようになった天正年間の後半からは、堺の茶の湯も他の地に波及していきました。しかしながら、その後、堺の町は、鎖国の措置などにより貿易が制限されたことで商業的に衰退してまいりました。